

嘉慶研究序説（1）

嘉慶四年正月・二月の上諭

相 原 佳 之
豊 岡 康 史
村 上 正 和
李 侑 儒

はじめに

嘉慶四年（1799）正月初三日（グレゴリオ暦1799年2月7日。以下、本稿では当時利用されていた時憲暦（太陽太陰暦）で日付を示す）、乾隆帝が逝去した。乾隆帝は六十年以上ものあいだ清朝の最高権力者として君臨し、その治世は「盛世」とも評される。しかし乾隆帝は退位した後も実権を握り続け、その結果、和珅の専横を招き、清朝は白蓮教の乱の鎮圧にも苦慮することとなった。こうした中で後を引き継いだ壮年の嘉慶帝が和珅に自殺を命じ、親政を始めたことは、当時の人々にとって新しい時代の始まりとして感じられたといえよう¹。事実、嘉慶帝は白蓮教の反乱鎮圧に精力的に取り組み、多方面において改革を次々と指示していった。

一般的には、嘉慶期は清朝衰退の始まりとして位置づけられている。ただしこの見方は嘉慶期の分析から導き出されたものではなく、清末の現状認識から遡って評価したものである。しかし嘉慶期は、単に衰退か否かという単純な枠組みでとらえられるのではなく、嘉慶帝の改革によって清代の政治と社会が大きく変貌した時期といえる。例をあげると、嘉慶四年に嘉慶帝は、政府への政策提言を認可する。文字の獄と通称される清初以来の言論統制が緩められたことによって、それまでになかった言論空間が生み出された²。この言論空間は、後にアヘン問題に関する議論が生まれてくる下地ともなった。また白蓮教反乱の鎮圧にともない郷勇を用いたことで、漢地世界の重要性は高められている³。では、嘉慶帝がおこなった政治、そして嘉慶帝が直面していた問題とは、総体としてどのようなものであったのだ

1 乾隆期の鬱屈した様子は、木下鉄矢『「清朝考証学」とその時代——清代の思想』（創文社、1996）が描く。

2 精神疾患患者、放浪者まで対象とする乾隆期の文字の獄の苛烈さについては、郭成康・林鉄鈞『清朝文字獄』（群衆出版社、1990）、常修銘「乾隆朝底層讀書人生活探析——以瘋人逆詞案為中心的討論」（『中国社会歴史評論』第14巻、2013）が論じる。

3 豊岡康史「嘉慶維新（1799年）再検討」（『信大史学』第40号、2015）。

ろうか。

これまでの清代の政治史研究では、雍正期を中心に数多くの蓄積があり、清朝統治のイメージを形成してきた⁴。一方で近年の研究動向としては、主として清初期を対象として、清朝を漢人王朝ではなく多面性を持つ広域帝国として位置付け、その統治構造を論じる清朝論が展開されている⁵。嘉慶期研究は、これまでの研究成果を踏まえて、乾隆期に蓄積された諸問題、嘉慶期における対処とその結果といった点を明らかにしていくものであり、入関前から雍正期にかけての清代史研究と十九世紀後半以降の近代史研究をつなぎ、「盛世—衰退」という王朝史観ではなく、より構造化された清代史像の構築につながる意義をもつ。

嘉慶期に関する先行研究としては、関文発の伝記研究をはじめとして一定の蓄積はあったが⁶、雍正期と近代史研究に比べれば、相対的には手薄であった。近年では個々の分野ごとに嘉慶期における変化を論じた実証的な研究も蓄積されているものの⁷、嘉慶期の研究はまだ開拓の余地を大きく残しているのが現状である。

そこで本稿および来年次以降に発表する続稿では、嘉慶期研究を進めていくための一作業

4 宮崎市定を中心とする朱批諭旨研究が先駆的なものとして挙げられる。東洋史研究会編『雍正時代の研究』（同朋舎出版、1986）。雍正帝に関する伝記としては、宮崎市定『雍正帝』（『宮崎市定全集』14、岩波書店、1991）、馮爾康『雍正伝』（人民出版社、1985）、楊啓樵『雍正帝及其密摺制度研究（増訂版）』（岳麓書社、2014）が今なお有用である。

5 杉山清彦『大清帝国の形成と八旗制』（名古屋大学出版会、2015）。谷井陽子『八旗制度の研究』（京都大学学術出版会、2015）もまた清初の権力構造について分析する。

6 関文発『嘉慶帝』（吉林文史出版社、1993）。

7 以下では、近年の嘉慶期研究を中心に列挙しておく。政治。豊岡前掲論文。片岡一忠『洪亮吉——清朝知識人の生き方』（研文出版、2013）。韓承賢（廖振旺訳）「文治之下的抗議——嘉慶四年蘇州士人的集体抗議与皇帝的反応」（『中央研究院近代史研究所集刊』第75期、2012）、唐屹軒「嘉慶皇帝的国家治理及其自我论述」（『東吳歴史学報』第28期、2012）、張国驥『清嘉慶道光時期政治危機研究』（岳麓書社、2012）。Wang Wensheng, *White Lotus Rebels and South China Pirates: Crisis and Reform in the Qing Empire*, Cambridge Mass: Harvard University Press, 2014. Daniel McMahon, *Rethinking the Decline of China's Qing Dynasty: Imperial Activism and Borderland Management at the Turn of the Nineteenth Century*, Routledge Abingdon, Oxon, 2015. また張瑞龍『天理教事件与清中葉の政治、学術与社会』（中華書局、2014）は、嘉慶帝の親政開始ではなく、天理教の乱の影響を強調する。

経済。倪玉平『清朝嘉道関税研究』（北京師範大学出版社、2010年）。劉朝輝『嘉慶道光年間制錢問題』（文物出版社、2012）。

法制。阿風（井上充幸訳）「清代の京控」（夫馬進編『中国訴訟社会史の研究』京都大学学術出版会、2011）、李典蓉『清朝京控制度研究』（上海古籍出版社、2011）、鈴木秀光「清代嘉慶・道光期における盗案の裁判」（『専修法学論集』第121号、2014）。

外交・海域世界。豊岡康史『海賊からみた清朝——十八～十九世紀の南シナ海』（藤原書店、2016）、村上信明「乾隆帝の時代の終わりと清朝の変容——清朝・チベット関係を中心に」（『史境』第73号、2017）。陳開科『嘉慶十年——失敗的俄国使团与失敗的中国外交』（社会科学文献出版社、2014）、張雅娟『清代嘉慶年間的海盗与水師』（人民出版社、2016）。

として、嘉慶四年にどのような政策が行われたのか、上諭を現代日本語に翻訳することで、通時的・包括的に示していく。紙幅の制限から全ての上諭を掲載することはできないため、本稿では嘉慶四年正月、二月の上諭の中から重要と思われるものを選び出した。

底本には中国第一歴史檔案館編『嘉慶道光兩朝上諭檔』（広西師範大学出版社、2000年）と、『仁宗睿皇帝実録』（中央研究院歴史語言研究所『清実録』DB）を用いている。

文中のアンダーラインと【 】は嘉慶帝によって加筆・訂正された箇所である。ただし、「之」や「所」など文章を整えるための加筆や、大きな意味の違いのない文言訂正については、訳では省略している。（ ）は訳者による補足である。また『仁宗睿皇帝実録』には白蓮教反乱の鎮圧に関する上諭が数多く収録されているが、本稿では紙幅の都合もあり割愛した。

1 嘉慶四年正月

正月初三日の朝、乾隆帝が死去してから、嘉慶帝は和珅・福長安らの身柄を拘束した。この間、嘉慶帝は緊急性の高い白蓮教反乱への対応（実録正月甲子条、丙寅条）と、乾隆帝死去に伴う連絡などを除き、大きな動きをみせなかったが、初八日から和珅弾劾の具体的な内容を練り上げながら、同時に改革の動きをみせてゆく。

No.18

嘉慶四年正月初五日、内閣が命令を受けた。朕は先帝から重責を引き継いでから、競々として統治に励み、ただ政治に失敗があるのではないかと憂慮してきた。先帝、先々帝は即位して後、みな建言を求める詔を出している。中国は広大で臣民も数多く、政務も非常に多い。様々な意見を聞き入れるとより聡明となり、偏った意見しか聞き入れなければ暗愚となる。一人か二人の建言しかなければ、たとえそれが公の心から出たものであっても、天下の務めを知ることはできない。【ましてやその建言が、公の心から出されたとは限らない。】『尚書』の堯典と舜典を繙いてみると、九官・十二牧を設けて、広く意見を探し求めて、賢才と協力して天下を治めている。そのため聖人の徳を持つ先帝や先々帝は、即位すると意見を求めるのを急務とした。ましてや朕のような徳の薄い者が、どうして虚心坦懐に率直な意見に耳を傾けないことがあろうか。特にこれを伝える。およそ九卿・科道官といった上奏の責任のある者には、人事や行政といったあらゆる事に関して、みな【密】奏にて隠れた民情を伝えることを許す。道理を失わず、諸臣は公平無私を心がけ、人事と行政に関して有益な企てをして弊害を取り除き、実際の政治に裨益するようにせよ。各々真心を尽くして事実依拠して意見を申し述べ、朕に欠けているところを補い、大勢の意見を集め益を広げようとする朕の意志に応えるように。

No.26

嘉慶四年正月初八日、内閣が命令を受けた。「成親王の永理⁸・元大学士で署刑部尚書の董誥⁹・兵部尚書の慶桂¹⁰はみな軍機処で業務に当たれ。戸部侍郎的那彥成¹¹と戴衢亨¹²は軍機処に留任させる。沈初¹³は老齢のため、軍機処での業務に当たる必要はない。」

No.27

嘉慶四年正月初八日、内閣が命令を受けた。「各部院の文武大官、直隸・各省の総督・巡撫・布政使・按察使といったおおよそ上奏の責任のあるもの、および軍中で兵を率いる大官らは、今後の上奏を【すべて必ず】朕の前に直接もたらし、副本を作成して軍機処に送るようなことは許さない。また各部院の文武大官は上奏内容を【事前に】軍機大臣に伝えてはならない。つまり、各部院から上奏文が提出された場合は、朕がすみやかに担当者呼んで、直接【協議し】、各役所に処理させるので、【軍機大臣に指示を仰いではならない】。どうして事前に上奏の内容を漏らして、互いに庇いあうような弊害を生み出せようか。この命令を知らしめよ。【各々が気を引き締めて従うように】。」

No.33

嘉慶四年正月初九日、命令を受けた。「和珅¹⁴の罪は重大であり、すでに解任の上、刑部に身柄を拘束させている。先日、京師の住居を捜査したところ、【僭越にも】臣下の住宅の規定を守っていない部分が多数みられた。思うに、薊州の墳墓にも規定違反、民間の田地の侵犯があるだろう。彼の地で蔵匿したり他人に預けたりした財産もあるに違いない。呉熊光に命じて、清河道の瞻柱¹⁵に現地へ行き詳しく調査を行い、和珅の建設した墳墓の図を作成

8 （愛新覺羅）永理（乾隆17年-道光3年/1752-1823）。乾隆帝の第11子。嘉慶帝の兄にあたる。嘉慶4年正月に軍機大臣となるが、同年10月に退く。

9 董誥（乾隆5年-嘉慶23年/1740-1818）。浙江省杭州府、富陽県の人。乾隆28年の進士。父親は乾隆半ばに工部尚書、礼部尚書を務めた董邦達。軍機大臣を嘉慶4年から嘉慶23年にかけて務め、嘉慶期の政権中枢を担った一人。

10 （章佳）慶桂（乾隆2年-嘉慶21年/1737-1816）。満洲鑲黄旗人。乾隆期の大学士尹繼善の子。軍機大臣を嘉慶4年から嘉慶17年にかけて務める。嘉慶期の政権中枢を担った一人。

11 （章佳）那彥成（乾隆29年-道光13年/1764-1833）。満洲正白旗人。乾隆期の大学士阿桂の孫。乾隆54年の進士で、嘉慶・道光期には陝甘総督、直隸総督、刑部尚書などの要職を歴任した。

12 戴衢亨（乾隆20年-嘉慶16年/1755-1811）。江西省南安府、大庾県の人。乾隆43年の進士。父の戴第元は乾隆後期に巡城御史、太常寺少卿を務める。軍機大臣を嘉慶4年から嘉慶16年にかけて務める。

13 沈初（雍正13年-嘉慶4年/1735-1799）。浙江省嘉興府、平湖県の人。乾隆28年の進士。軍機大臣を嘉慶元年から嘉慶4年にかけて務める。

14 （鈕祜祿）和珅（?-嘉慶4年/?-1799）。満洲正紅旗人。乾隆帝に重用され、乾隆41から嘉慶4年にかけて、長きにわたって軍機大臣の地位にあった。

して提出するよう伝えさせよ。さらに民間の田地の侵犯、他人に預けた財産などが無いか逐一調査させるように。隠匿や調査漏れがあってはならない。和珅の家人の呼什図、すなわち内劉は多くの財産を有し、所有する田地の多くが郊外にあると聞く。呉熊光¹⁶は、これらもあわせて調査し、いささかもごまかしがあってはならない。付近にいる順天府尹にも通知して厳しく調査を行わせるほか、この命令を通知せよ。」軍機大臣は陛下の命令に従い、直隸布政使の呉熊光に通知する。

No.34

嘉慶四年正月初九日、命令を受けた。「和珅・福長安¹⁷はすでに解任の上、刑部へ身柄を渡した。京師の財産はすべて調査・押収したが、熱河の住居にも財産があるに違いない。熱河の近辺にいる書魯¹⁸は調査・押収を行い、器物もあわせて京師へ送るように。さらに姚良¹⁹も自ら器物を京師へ輸送するように。わずかでも粗漏があってはならない。」軍機大臣は命令に従い、熱河総管の書魯・姚良に本命令を通知する。

No.39

嘉慶四年正月十一日、内閣が命令を受けた。「和珅は先帝の特別な恩顧を受け、侍衛から大学士に拔擢され、長く軍機処で職務に当たってきた。先帝から受けた恩は、朝廷の諸臣と比べ物にならないほどであった。朕は先帝の後を継ぎ、今回、先帝の逝去に伴い、喪に服するなかで、たびたび『論語』の三年改むる無きの義を思い出している。先帝が天を敬い、祖先を法とし、政治に励み、民を愛し、心を尽くして政治を行ったことは、国内外すべての人に知られているところである。この教えは永遠に家法とすべきであり、三年改むる無きというような話ではない。先帝が選んだ重臣を、朕が軽々しく更迭することは【断じてできない】。たとえ罪あるものでも、【もし】許すべきところがあれば、その立場を保とうと考えなかったことはない。これが朕の心のうちであり、先帝の考えに副わんとするものである。しかし和珅の罪状は重大である。さらに【御史たち】から罪状を列举した弾劾も届いており、もはや少しも躊躇はできない。そのため朕は遺詔を発表した日に、【ただちに】和珅の職を

15 瞻柱（乾隆22年-嘉慶11年/1757-1806）。満洲正紅旗人。嘉慶4年から10年にかけて福建、直隸で布政使、按察使を務める。

16 呉熊光（乾隆15年-道光13年/1750-1833）。江蘇省蘇州府、昭文県の人。乾隆37年の中正榜。乾隆期に阿桂の信任を得るも、和珅とは対立していた。嘉慶期には湖広総督、兩広総督、直隸総督を歴任する。

17 （富察）福長安（?-嘉慶22年/?-1817）。満洲鑲黄旗人。軍機大臣を乾隆45年から嘉慶4年まで務める。父親は乾隆前半に軍機大臣、歩軍統領であった傅恒。

18 書魯。満洲正白旗人。生卒年および詳細な経歴は不詳。嘉慶元年に粵海関監督、嘉慶2年に兩淮塩政を務めている。

19 姚良。生卒年および詳細な経歴は不詳であるが、この頃は熱河総管であった。

解き、拘束して取り調べたのである。ここにその罪を列举し、皆に特に知らせる。

朕は乾隆六十年九月初三日に先帝から皇太子に冊封されたが、このことは宣布されなかった。にもかかわらず、和珅は初二日のうちに朕に如意を送り、機密を漏洩した。あろうことが朕の推戴を功績にしようとしたのである。

昨年正月、先帝が円明園に和珅を召見した。その際、和珅は馬に乗って左門から正大光明殿を過ぎ、寿山口まで行った。これ以上ないほどに先帝を蔑ろにしている。

また、足が悪いことを理由に、輿に乗ったまま内廷に入り、神武門をそのまま出入りしていた。これを人々が見ていてもまったく憚るところがなかった。

そのうえ、宮中から暇を出された侍女を側室にするなど廉恥を顧みることさえない。

近年来、四川・湖北の白蓮教反乱の鎮圧作戦を行っているが、先帝は軍事報告の到着を待ち望み、日々、気をかけ心配していた。しかし、和珅は各地の軍営からの報告が到着しても勝手に処理を先延ばしにし、実際の状況を隠蔽しようとしたため、鎮圧は今に至るまで完了していない。

以前、先帝は和珅を吏部尚書・刑部尚書に任命し、のちに和珅が軍事費の管理に長けていることから戸部からの題本による報告も管理させた。これによって、和珅は一人で六部の業務を独占管理することとなったのである。

昨年冬、先帝が体調を崩した際、朱批の筆跡が不明瞭になった部分がままあった。和珅は憚ることなく、「削除した方がよい」と主張し、自ら命令を起草した。

十二月、奎舒²⁰が循化・貴徳の二庁で番賊が一千名あまりを集め、ダライ・ラマの商人の牛を奪い、二名を殺害し、さらに青海省内で略奪を働いた事件について報告した。和珅は報告をそのまま返却し、隠蔽して処理を行わなかった。

先帝逝去の後、朕はモンゴル王公のうち、天然痘にかかったことのないものは京師に来る必要はないと命令を下した。和珅は命令に従わず天然痘にかかったことのあるものも、ないものもすべて京師にこないよう指示し、国家の外藩慰撫の意図を無視したのである。【その了見は計り知れない】。

大学士の蘇凌阿²¹は両耳が遠くなり、衰えて職務に堪えないにもかかわらず、和珅の弟和琳の姻戚であることから、これを隠蔽して報告しなかった。侍郎の呉省蘭²²・李潢²³、太僕寺卿の李光雲²⁴などは、みな和珅の邸宅で教育に当たったことがあったため、和珅がこれを

20 （璜郭羅特）奎舒（?-嘉慶14年/?-1809）。蒙古正紅旗人。烏什辦事大臣、伊犁領隊大臣を務める。

21 （他塔拉）蘇凌阿（康熙56年-嘉慶4年/1717-1799）。滿洲正白旗人。東閣大学士、刑部尚書を嘉慶2年から嘉慶4年にかけて務めた。

22 呉省蘭（?-嘉慶15年/?-1810）。江蘇省松江府、南匯県の人。乾隆43年の進士。乾隆末から嘉慶4年にかけて、順天学政、浙江学政、工部右侍郎などを務める。

23 李潢。生卒年不詳。湖北省安陸府、鍾祥県の人。乾隆36年の進士。乾隆末から嘉慶4年にかけて、兵部右侍郎・左侍郎、浙江・江西の学政を務める。数学に秀でる。

推挙して卿貳に就け、さらに学政を兼任させた。

また、軍機処で次の昇格リストに記入されている人員を勝手に除名した。種々の専横は、枚挙にいとまない。

先日、和珅の家産を調査・押収したところ、楠で建てられた住居は僭越かつ奢侈で規定を無視したものであった。多くの宝閣や隔段の様式は、みな寧寿宮をまねたものである。庭園や建物の装飾は円明園の蓬島・瑤臺と同様である。どのようなたくらみがあるか知れたものではない。また所有する宝石の中には、真珠の念珠が二百本あまりあるが、多くは内廷のものの数倍の大きさがあった。さらに大ぶりの真珠に至っては、皇帝の冠頂に用いるものよりも大きかった。宝石頂は、和珅の立場で用いるべきものではなく、真宝石は数十あまりあり、大宝石（原石の塊）の塊も多数見つかったが、どれも内廷にはないものであった。金銀などの調査は終わっていないが、すでに数百万を超えている。和珅は、これまでにないほど貪欲に私腹を肥やしていたのである。

以上の各項目は、すべて王・大臣らが共同で取り調べを行ったもので、いずれも和珅も認めて否定しないところである。和珅はこのように良心を失い、君主は眼中になく、重要な軍務や国務を誤り、権力を弄んで弊害をまき散らし、僭越にも不法を繰り返した。しかし、貪欲に国家の富を掠め取り私欲を肥やすなどは、まだ罪の小さいものである。実に、先帝の厚恩を受けておきながら、それに背いてきたといえよう。

もし数年の間、廷臣が和珅を弾劾していれば、先帝の処断を仰いで厳しい刑罰を課することができた。しかし、誰も報告しなかった。【内外の】諸臣は先帝が高齢のため、先帝の宸襟を煩わすのをはばかったとしているが、実際は和珅を恐れて口を噤んだに過ぎないことは、朕もよく知るところである。現在、和珅の罪状は既に明らかになった。先帝に対する罪は、数えきれないほど多く、これを放置しては、先帝の御霊に申し訳が立たない。このやり切れない苦衷を、地方をあずかる汝らはどう思うか。京師の王・公・大臣に通知して会議を開き和珅の罪状を検討させるほか、各省の総督・巡撫は、朕が指摘した和珅の罪状がいかなる罪に当たるのか、このほかに罪状があるのかどうか、それぞれ速やかに事実を踏まえて回答せよ。」

『仁宗睿皇帝実録』卷三十七、嘉慶四年正月十一日

軍機大臣らに命じる。「昨年十二月十七日、奎舒が、貴徳・循化で番人が集まり、ダライ・ラマの商人の牛などを奪い取ったと報告したが、和珅は勝手に返却してしまった。今になって調べてみると、奎舒の所見は正しいものであった。この命令を受け取った後、速やかに青海にいるモンゴルの兵丁を率い、番人たちを教諭するように。もし彼らが恐怖を覚えれば、賊の首領と奪った牛を一緒に引き渡すであろう。引き渡しに来たものには直接会ってよくよ

24 李光雲。生卒年不詳。乾隆36年の進士（『高宗純皇帝実録』卷884）。

く言い聞かせ、首領は速やかに処刑して、さらし首するように。それ以外の番人は適切に慰撫しておき、徹底的に追及する必要はない。もしなお恐れを知らず、好き勝手に抵抗するようであれば、必ずや兵を集めて掃討すべきである。実態に即して報告し、朕の指示を待って行動せよ。これを知らしめよ。」

No.45

嘉慶四年正月十二日、内閣が命令を受けた。「呉省欽²⁵の奏摺に、監禁している賊魁の王三槐を速やかに処刑せよとあった。どうして爾の提案を待たなくてはいけないのか。これまですぐに処刑しなかったのは、四川北部の賊魁である羅其清が護送されてきてから両者を軍機大臣に引き渡し、刑部とともに二名同時に取り調べを行うためである。これらの主犯を釈放して、賊党とともに投降させるなど考えるわけがない。また候補知府の李基は兵法に通じ、『手車火雷列卦図』を持っており、また拳人の王曇は気をため手のひらから放ち、人を押しのけることができるというので試してみてもどうか、とあった。荒唐無稽である。以前、広く言路を開くよう命じたが、呉省欽が御史の長でありながら和珅と福長安を一言も弾劾しなかったのは、その威勢を恐れたのであろう。和珅と福長安が職を解かれ、刑部に拘束された後も、彼はまだ恐れを抱き、口を噤んでいた。今回各科道から密奏が送られているのをみて、彼らを束ねる立場にいるため一回でも上奏しないと自分の責任を全うできないと思ったのだろうが、その内容は荒唐無稽である。試みに問う。李基の作った『手車火雷列卦図』と、本朝で訓練している九進連環とを比べて、どちらが使えると思っているのか。気をためて手のひらから放つなど、稗官野史でいう掌心雷のようなもので、邪術にすぎない。今まさに教匪を掃討している時であり、妖言左道を根絶し、厳しく取り締まっていて暇無いほどだというのに、どうして試せようか。呉省欽は都察院左都御史でありながら、正しい政治のあり方をわきまえず、邪言に溺れ、みだりに上奏した。邪教を学ぶものと何が違うのか。呉省欽を刑部に引渡し、厳しく処分せよ。」

No.46

軍機大臣が沿海各地の將軍・総督・巡撫に伝える。嘉慶四年正月十二日、命令を受けた。「ある者が次のように上奏した。近年、海賊が蔓延っているが、これは商船から掠奪した食料を商人が密かに高い値段で買い取って久しく手元に蓄えて（売り惜しんで）いるためである。これを禁止し、あわせて港や陸路に多くの兵を展開させるよう求める、と。これらのことは、沿海各地方では免れられないものである。しかしどのように対処すればよいのか、【朕は】根拠のない臆断はできない。およそ沿海の將軍・総督・巡撫などが自らの管轄下の港に

25 呉省欽（雍正7年-嘉慶8年/1729-1803）。江蘇省松江府、南匯県の人。呉省蘭の兄。乾隆28年の進士。

嘉慶2年から3年にかけて吏部左侍郎、右侍郎を務め、この時は都察院左都御史であった。

ついて詳しく調査を行い、洋上が次第に穏やかになるよう取り締まりに努めて、商人や民の障害とならないようにせよ。各々の思うところを事実を踏まえて上奏し、朕の指示を待って実施せよ。水師各營をどのように訓練し、綱紀肅正を図るかも、詳細に議論して上奏せよ。上奏文の写しを送り、閲覽させる。これを各々に知らせめよ。」命令に従い伝える。

No.47

軍機大臣が、各省の將軍・總督・巡撫・提督・總兵に伝える。嘉慶四年正月十二日、命令を受けた。「近頃、京師の歩軍統領の役所および巡捕五營の管轄下にある歩甲兵丁のうち、和珅の私宅で働くものが【ついには】一千名あまりにのぼっていたと聞いた。【このようなことは普通では考えられない】。両翼の歩軍協尉や司員、筆帖式などは衛兵十数名を連れており、その結果【歩甲の数】は日ごとに減少しており、盜賊は夜間ほしきままに暗躍している。全くあってはならないことである。国家が兵士の数を定めるのは、盜賊の取り締まりのためであって、どうして大小の武官や役人に無駄な食料を支給し、さらには部隊の兵士を私宅で働かせることができようか。兵の数が日ごとに少なくなり、盜賊が横行するのも当然である。京師は皇帝のひざ元であり、眼もよく行き届くはずなのに、兵制はこのように規律が緩んだ状態である。こうしたひどい状況は、ほかの直隸・各省においても同様であろう。該当する將軍・總督・巡撫・提督・總兵は公平かつ事実に基づき調査を行い、同様の状況であれば、もともとの兵数に合うように補充し、食料の無駄な支給や、大小の武官や役人が兵士を私役するなどは許さず、事実を明らかにして地方を安んぜよ。兵を養うのは民を守るためであり、平時から訓練を行い、動員したときに力を発揮できるよう願う。近頃、各省の軍務をみるに、提督や總兵などの大官は富貴に狎れ、苦勞を惜しんで、軍務を參將や守備に委ねている。參將や守備はその軍務を千總や把總に押し付けるなど、旧來からの惡習に従い怠惰に溺れている。いわゆる訓練・演習などまったく有名無実となっているなら、このような兵制などは必要ない。特に明確に命ずる。該当する將軍・總督・巡撫・提督・總兵はこのような惡弊を取り除き、部下に厳しく命令して、まじめに訓練に当たらせ、練度の低い怯懦な兵の技術を熟達させ、全ての者を強靱な兵士として、必要なときに対応できるようにせよ。もし今回の命令・訓戒の後、悔い改めず、以前と同じ轍を踏むようであれば罪を逃れることはできない。聞いていないなどといわないように。この命令を知らせめよ。」命令に従い伝える。

No.48

嘉慶四年正月十三日、内閣が命令を受けた。「本日、伊江阿²⁶から馭伝によって送られてきた奏摺には、和珅への書信もあった。すでに先帝の崩御を聞き及んでいるらしく、和珅に

26 (拜都)伊江阿(?-嘉慶6年/?-1801)。滿洲正白旗人。嘉慶元年-4年まで山東巡撫を務める。祖父は雍正期に巡撫を歴任した布蘭泰、父は乾隆半ばに吏部尚書、礼部尚書などを歴任した永貴。

は悲しみを抑えて【公務に務めるように】と述べられている。しかし、父親を亡くした朕については【一文字も言及が】なかった。常識的に、弔問の手紙では死者の子への慰めがあるべきではないか。今回、伊江阿は和珅には再三丁寧な哀悼の意を伝えているのに、朕には普段通りの請安と、地方における通常の案件について報告しているだけで、何を考えているか分かったものではない。先日、呉熊光は先帝崩御を聞き及び、切々と哀悼の意を込めて朕の身を気遣うための奏摺を送り、その言葉は真に迫るものがあった。これこそまさに君臣の義というものだろう。呉熊光は漢人であり、布政使に過ぎないが、なお【良】心がある。一方、伊江阿は満洲人であり、巡撫に任じられ、大学士永貴の子である。またかつて軍機処で働き、何も知らない者と同列に扱うことはできない。しかし、今回は朕を軽んじ、和珅にのみ慇懃に哀悼の意を述べている。伊江阿は普段から先帝を軽んじ、今日また朕を軽んじ、和珅しか目に入らないようである。これにまさる忘恩蒙昧はない。伊江阿には厳しく申し伝え、刑部に身柄を渡し、厳しい処分を行う。さらに申し開きを行わせよ。」

No.52

嘉慶四年正月十四日、内閣が命令を受けた。「吏部が都察院左都御史の呉省欽の処分案を提出した。先日の呉省欽の奏摺には、不適当な語が多くあった。彼の平常の学問を考えると、このように荒唐無稽なことは考えにくい。思うに、彼は自分が和珅の一派であり、さらに学政の任にあるとき、行状も平凡であったので、人に罪状を列举されて弾劾されるのを恐れて、できるだけ処分を軽くしようとして、先にでたらめな上奏を行い、罷免されて故郷に帰り、田舎暮らしを楽しもうとしていたのではないか。うまく考えたと思っているのだろうが、おおむねこのようなところだろう。ただしこれは、動機に対する譴責になってしまう。呉省欽は大きな失敗が露見したわけでもなく、朕も過剰な処罰をするつもりはないので、当面は追及しない。荒唐無稽な上奏をし、御史を束ねる任に堪えないことから、呉省欽は吏部の提案通り、免職の上【故郷に返す】。」

No.55

嘉慶四年正月十五日、内閣が命令を受けた。「本日、刑部侍郎の熊枚²⁷を召見し、法律について命じた。以前より、刑部で律を引用して量刑を定める時、律の本文以外に「罪を贖いきれない」、「懲戒を示したことになる」、「さらに重い刑を科す」【など】の表現があった。これは妥当ではない。罪の軽重については、律に条文があるので、事件の内容を勘案して、適当な条文を引用するべきであり、軽くても重くてもいけない。こうしてこそ法の公平さが保たれるのである。律の本文を引きつつ、「罪を贖いきれない」と称して重罰を提案し、数

27 熊枚（雍正12年-嘉慶13年/1734-1808）。江西省広信府、鉛山県の人。乾隆36年の進士。この後、刑部尚書、工部尚書、都察院左都御史を歴任する。

等も重くするに至っては、律に準じて処理しているとは言えないし、もはや律例を用いる必要などない。もし事件の内容から重く罰する必要があるのであれば、朕が自ら案件ごとに検討する。結局のところ、「罪を贖いきれない」などという表現は、法を執行する官が口にしてはならないものなのである。今後、刑罰に関与する役所は、法典を順守し、もっぱら律の本文を引用すべきであり、律から逸脱して、「罪を贖いきれない」、「さらに重い刑を科す」などの表現をしてはならない。「雖」・「但」などの強調するための表現も使ってはならない。量刑提案が行われた後、朕が事件の内容を確認して、量刑の調整を行ったとしても、誤りとして処罰しない。朕の刑罰を慎重に行いたいという意志に沿うように。どのようにして律によって処断し、画一に法を運用すべきか、軍機大臣は刑部とともに詳細に議論して提案せよ。胡季堂²⁸は法律に詳しい。現在、京師に滞在しているので、議論に加わるように。」

No.56

嘉慶四年正月十五日、内閣が命令を受けた。「朕が先帝の朱批を拝読したところ、内外大官の貢物進呈を厳禁することについての二編の命令があった。先帝の訓諭の内容はあきらかであり、戒めるところは適切である。そもそも「貢」とは「禹貢」に始まるもので、「土地の状態にあわせて貢物を決める（『書経』禹貢）」ことを指す。すなわち珍奇なものを貴ぶのではなく、「珍しいものをありがたがり、日用品を卑しむようではいけない（『書経』旅獒）」のである。先帝はたびたび貢物の進呈を禁止した。しかし、和珅が権力を握り、賄賂を受け取るような政治をしていたので、地方の総督・巡撫などは貢物を進呈してもよいのか、先に和珅へ確認していた。和珅は勝手に許可を出すことで、権力をひけらかしていたのである。しかし総督・巡撫からの貢物のうち先帝にもたらされたのは、全体の一割か二割に過ぎず、それ以外はすべて和珅の私宅へ持ち込まれた。それ故、先帝がしばしば貢物を禁止しても、この習慣がなくならなかったのである。

考えてもみよ。地方で用意された玉・銅甕・書画・挿屏・掛屏など、総督・巡撫が自ら購入したであろうか。必ずや州や県から得ているはずである。そして州や県は民衆からこれらを得ており、少しでも足りないようなら、鞭打ってでも従わせたのだらう。民間の有限の富を、官吏は飽くことなく奪い取ろうとするのである。民はこれに耐えられるだろうか。また骨董品などは、飢えても食べることができず、寒くても着ることもできず、まさに糞土以下であり、これを珍重できようか。我が国家は百数十年にわたり平和と繁栄を誇り、財政も満ち足りている。内務府にそろえられた物品は溢れんばかりに並んでいて、現在では保管する場所すらなくなろうとしている。また貢物は決して内廷の品々には勝てず、たとえやや優れたものがあつたとしても、朕はそれを糞土のようなものだとは思わない。朕が宝とするの

28 胡季堂（雍正7年-嘉慶5年/1729-1800）。河南省光州、光山県の人。雍正期に兵部右侍郎、礼部侍郎などを務めた胡煦の子。乾隆44年から嘉慶3年にかけての刑部尚書で、この頃は直隸総督の地位にあった。

は、季節が順調に進み、豊作が続き、民が安んじ、財産が豊かであり、有能な人材を得て、政治を滞りなく行うことである。これこそ国家の至宝ではないか。

進呈すべき地方からの貢物とは、日用に必要なものである。たとえば、吉林・黒竜江の將軍が毎年進呈してくる貂の皮・東珠・人参などは、当地で産出するものである。そのほか、四川や広東の薬剤、九江の磁器、江蘇・浙江の絹や緞子、徽州の墨や湖北の筆・紙・茶葉・果実などは、「土地の状態にあわせて貢物を決める」の意義にほかならないので、規定通りに進呈すべきである。【如意】や玉器・銅器・磁器・書画・掛屏・挿屏などはすべて進呈を許さない。北京の王・公・大臣などは毎年の支給分では、公務に必要な出費にも【なお足りないのに】、どうして余裕があらうか。貢物の進呈は許さない。内廷や翰林院などで作成した御製詩文集や、自作の書画などは進呈しても【まだ良いが】、骨董品の進呈は【断じて】許さない。

各省の塩政・織造・各税関の監督などは、地方で民を治める立場にはなく、納めるべき盈餘銀の額を、戸部に調査して減額するように、いま指示を出している。公務にも余裕ができるであろう。もし進呈すべき貢物があれば、これまでの規定通りに進呈せよ。また、新年にあたり、王・公・大臣・総督・巡撫などが如意を進呈し、吉兆があるように願う習慣があるが、まったく無意味である。諸臣は如意と思っているかもしれないが、朕がそれをみればかえって不如意と思うので、すべて禁止とする。朕のこの厳しい命令の後、諸臣のなかにさらに禁じた貢物を進呈するものがあれば、すぐに違制律を適用して罪に問い、決して容赦しない。特に明らかに命じる。内外の者にこれを知らしめよ。」

No.57

嘉慶四年正月十六日、内閣が命令を受けた。「軍機処は機密を扱う重要な組織であるが、以前から軍機章京の定数はなく、軍機大臣が選ぶのみで謁見はしていなかった。考えてみるに、各役所や【各旗】の官員は、たとえ【筆帖式】・驍騎校・護軍校といった地位の低い官員であっても、謁見せずに任命することはない。軍機章京の職責は重く、どうして軍機大臣が引きつれて朕に謁見しない道理があらうか。以後、満・漢の章京はそれぞれ定員を十六名とし、内閣・六部・理藩院の尚書・侍郎は、司員・中書・筆帖式といった官員のなかに【人柄が優れて】、年齢もふさわしく気力も充実し、達筆なものがいれば軍機大臣に預け、軍機大臣は彼らを引きつれて謁見し、朕の任命を待つように。軍機処の次回の昇格リストに記入されている場合、もし空きが出れば、順次補充していく。今回採用される満・漢の章京は、この新しい規定に従って処置せよ。」

No.62

李基の三編の文章が、臣らの閲覧のために下げ渡された。臣らで詳しく検証したところ、「行軍剿賊論」は兵法家が普段から論じていることで特別な見解はない。「八卦車輪陣説」も、

『武経』の言葉をそのままなぞっているだけで、現在に実行するのは困難なものである。「設卡守禦論」にある「小さい村を大きい村に編入する」という説は、先日、御史が反駁したように、却下すればよいと思われる。ただし、その語句には規定に違反する箇所はないので、三編の文章はすべて李基本人に返却すればよい。また、先日下げ渡された「郷勇の緑営編入についての奏摺」もすぐに実施することは困難であると思われる。奏摺の原本を謹んで提出する。正月十六日。

No.64

嘉慶四年正月十五日内閣が命令を受けた。「以前、命令を下して、和珅の罪状を各地方の総督・巡撫に伝え、その処罰を議論させた。今回、直隸総督の胡季堂の奏摺には「和珅は良心を失った人でなしであり、種々の反逆行為と、国を蝕み民衆をしいたげたことは、四川・湖北の賊匪と変わるところはない。貪欲で放蕩にふけり、まさに恥知らずの小人に過ぎず、狂気極まり、君主を蔑ろにした。大逆罪を適用し、凌遲処死とすべきである。さらに薊州に建てられた和珅の墳墓には、身の程知らずな規定違反があり、さらに付近の州県で質屋を経営していたので、その財産を調べている」とあった。さらに連日、和珅が所有していた金銀財宝が押収されている。改めて和珅の罪を皆に知らしめる。

朕は、乾隆六十年九月初三日に皇太子に冊封されたが、このことは宣布されなかった。にもかかわらず、和珅は初二日のうちに朕に如意をおくり、機密を漏洩した。あろうことか、朕の推戴を功績としようとしたのである。大罪その一である。

昨年正月、先帝が円明園に和珅を召見した。その際、和珅は馬に乗ったまま左門から入り、正大光明殿の前を過ぎ、寿山口に至った。これ以上ないほどに先帝を蔑ろにしている。大罪その二である。

また足が悪いことを理由に、輿に乗ったまま内廷に入り、そのまま神武門を出入りしていた。これを人々が見ていてもまったく憚るところがなかった。大罪その三である。

さらに、宮廷から暇を出された侍女を妾とした。廉恥を顧みない行為である。大罪その四である。

四川・湖北の教匪の鎮圧が始まってから、先帝は軍事報告の到着を待ち望み、日々、気にかけて心配していた。しかし、和珅は各地の軍営からの報告が到着しても勝手に処理を先延ばしにし、先帝を欺いていた。そのため、軍務は長引きまだ終わりを迎えていない。大罪その五である。

先帝の体調が芳しくなくなったときも、和珅は全く憂いを見せず、謁見後に外廷のものと話す時もいつも通り談笑していた。喪心病狂である。大罪その六である。

昨年冬、先帝が病をおして上奏文を処理した際、朱批などの文字が不明瞭になった部分があった。和珅は憚ることなく「削除した方がよい」と称して、自ら代筆した。大罪その七である。

以前、先帝の命令により、和珅に吏部・刑部の業務を管理させた。ついで和珅が軍費の計算に手馴れていることから、戸部の題本による支出報告も管理させた。これによって和珅は戸部の業務も独占することとなり、規定を変更し、戸部官僚に全く議論に参加させなかった。大罪その八である。

昨年十二月、奎舒が報告した、循化・貴徳の二庁で、番人の賊徒一千人あまりが、ダライ・ラマの商人の牛を掠奪し、二名を殺害し、青海で略奪を働いた事件について、和珅はその報告を返却してしまい、事件を隠蔽して処理しなかった。辺境の事柄を蔑ろにしている。大罪その九である。

先帝逝去後、朕は、蒙古王公のうち、いまだに天然痘を発症したことの無いものは京師へ来る必要はないと命令を下した。和珅は命令に従わず、天然痘の発症如何にかかわらずみな京師へ来る必要がないと指示した。国家が外藩を慰撫する意図を全く顧みていない。その了見は計り知れない。大罪その十である。

大学士の蘇凌阿は両耳が遠くなり、衰えて職務に堪えないにもかかわらず、和珅の弟和琳の姻戚であることから、これを隠蔽して報告しなかった。侍郎の呉省蘭・李潢・太僕寺卿の李光雲などは、みな和珅の邸宅で教育に当たったことがあったため、和珅が彼らを推挙して卿階に就け、さらに学政を兼任させた。大罪その十一である。

軍機処で次の昇格リストに記入されている人員を勝手に除名した。種々の専横は、枚挙にいとまない。大罪その十二である。

先日、和珅の家産を調査・押収したところ、楠で建てられた住居は僭越かつ奢侈で、規定を無視したものであった。多くの宝閣や階段の様式は、みな寧寿宮をまねたものである。庭園や建物の装飾は円明園の蓬島・瑤臺と同様である。どのようなたくらみがあるか知れたものではない。大罪その十三である。

薊州の和珅の墳墓には、あろうことか（皇帝の陵墓のみに許される）享殿を設け、隧道もあった。付近住民はこれを和陵と呼んでいたという。大罪その十四である。

和珅が所有する宝石の中に、真珠の念珠が二百本あまりがあるが、多くは内廷のもの数倍の大きさがあった。さらに大ぶりの真珠に至っては、皇帝の冠頂に用いるものよりも大きかった。大罪その十五である。

また宝石頂は、和珅の立場で用いるべきものではない。所蔵されていた真宝石頂は数十あまり、大宝石（原石の塊）も多数見つかったが、内務府にはないものもあった。大罪その十六である。

和珅の私邸にあった銀両や衣服などは、一千万件を越えている。大罪その十七である。

さらに夾牆には金二万六千両あまりが、個人金庫には金六千両あまりが、地下室には銀百万両あまりが隠されていた。大罪その十八である。

京師付近の通州・薊州などで質屋や両替商などを経営しており、その資本は十万両あまりにのぼる。首輔大臣でありながら、小民と利を争っていた。大罪その十九である。

和珅の家人劉全は、下賤な家奴の身でありながら、押収したその財産はなんと二十万両あまりに及ぶ。大小の真珠の腕飾りも見つかった。横暴なやり方でせびり取ったりしなければ、ここまで豊かになることはない。大罪その二十である。

これ以外にも貪欲かつ横暴で、狂気の沙汰としか思えない行為が数えきれないほどある。このような輩は、これまでに見たことも聞いたこともない。胡季堂の原本は、京師の文武三品以上の各官員と翰林院・詹事府・科道各官に回覧させ、慎重に議論し上奏させよ。このうち自ら意見のあるものは、別に奏摺により上奏することを許す。もし、複数のもので意見が一致した場合は、連名で上奏せよ。

福長安は、祖父・叔父・兄弟まで代々恩を受けること、餘人とはくらべものにならない。軍機処で職務に当たっているときは、和珅と朝晩ともにおり、和珅が貪欲に私腹を肥やし、種々の不法行為に手を染めていたことを最もよく知っているはずである。福長安は、先帝の重恩を受け、常々、先帝と二人きりになることがあった。この時に和珅の罪を直接申し上げたならば、ほかのものとは違い、確固たる証拠があったはずだ。先帝もすぐに和珅を重く罰して処刑したはずであり、以前の訥親断罪と同様、寛容に扱うことがあろうか。軍務・国務をここまで誤らせることもなかったはずである。先帝がご高齢であるため煩わせたくはなかったとしても、朕に直接話せばよいではないか。しかしこの三年間、和珅の罪状について上奏がなかったことは、和珅を庇っていたも同然であり、その罪はあきらかである。もし、福長安が朕の前でわずかでも語っていれば、朕は断じて福長安を和珅と一緒に解任・拘束するようなことはなかった。現在、福長安の私邸の財産を調査・押収している。その財産は、和珅の金銀・真珠・宝石など千万を超えるような有様には及ばないが、所持するのにふさわしくないものが多数押収された。その貪欲で良心に背いていることは、和珅に次ぐといえよう。あわせて罪を問う。

No.70

嘉慶四年正月十八日、内閣が命令を受けた。「大学士・九卿・文武の大官・翰林院・詹事府・科道官などが、和珅・福長安の罪名をあげ、それぞれ和珅は大逆律を適用して凌遲処死、福長安は朋党律を適用して斬刑とし、両者とも即時処刑にする案を定めた。和珅の種々の僭越と専横の罪は重く、法においていささかも容赦できない。聖祖康熙帝は鰲拜²⁹を誅し、世宗雍正帝は年羹堯³⁰を誅し、先帝は訥親³¹を誅した。和珅はこれら誅殺された三名と同等の

29 (瓜爾佳) 鰲拜 (?-康熙 8 年/ ?-1669)。満洲鑲黄旗人。康熙帝を輔弼していた実力者であったが、後に排除された。

30 年羹堯 (?-雍正 3 年/ ?-1725)。漢軍鑲黄旗人。康熙末から雍正期の実力者であったが、雍正帝に排除された。

31 (紐祜祿) 訥親 (?-乾隆 14 年/ ?-1749)。満洲鑲黄旗人。乾隆帝の信任を得ていたが、金川遠征で失敗し処刑された。

位にあるが、罪はそれ以上のものである。

以前、鰲拜と年羹堯は特別に自尽を命じた。訥親は軍務を誤ったことから軍前で処刑された。和珅の罪状について論じるなら、彼は軍事報告を御前へもたらすことを阻み、実情を隠蔽しようとした。各地の軍営は和珅の指示に従い、反乱参加者を討伐したと偽りの報告をして軍糧の横領を許したのであり、そのために今に至るまで鎮圧が完了していない。軍務・国務を誤ったその罪は極めて重く、大逆罪に照らして凌遲処死とせずとも、訥親の先例にならい、速やかに処刑すべきである。このことを一年か二年たってから処理するなら、その一線すらも許せなくなる。しかし、現在は先帝葬送の時であり、和珅の即時処刑は、その罪が確たるものであるとはいえ、朕の心に忍びないところがある。また和珅の罪は訥親以上のものであるが、軍営に身を置いていたわけではない点が訥親とやや異なる。我が国には、皇室のものや貴顕のものの処罰に関する規定がある。和珅が良心を失い、蒙昧な人でなしである以上、八議を援用して減刑することは難しい。ただし、和珅が首輔大臣であったことを顧みて、いささかも容赦はできないところであるが、市中へ遺体を曝すことは免ずる。和珅には特別に自尽を命じる。これは朕が国家のあるべき姿からとった選択であり、和珅のために行うものではない。

福長安が先帝から受けた恩は厚く、和珅に次ぐものである。さらに和珅と朝晩ともにおり、和珅の罪状を最もよく知る立場にあった。さらに常々先帝と二人きりになることがあり、その時に弾劾していれば、その罪はあきらかなのだから、先帝は必ずや和珅を即座に誅殺したであろう。先帝は断じて和珅をかばい、福長安を告発した罪で連座させるようなことはなさらなかったはずだ。にもかかわらず、福長安は先帝が高齢であることから、機嫌を損ねることをおそれ、姑息な忠誠心をひけらかし、あえて告発しなかったなどという。朕が皇太子に冊封されてからすでに四年になる。この間、福長安は内廷に宿直していたが、和珅と一緒にでないときには、朕と二人きりになることもできた。あるいは和珅の罪状を並べ、密かに奏摺を提出すればよかった。【もしこれまでに一言か二言でも上奏していれば】、今回、朕は福長安を和珅と一緒に罪に問わないばかりでなく、官職も剥奪しなかったであろう。しかし、福長安は一貫して一言も弾劾を行わなかった。福長安は和珅とかばいあうことを考えていたのであろう。どれだけ言葉を並べても言い逃れはできない。

現在、福長安の私邸の財産を捜査・押収しているが、すでに所有すべきではないものも見つかっている。普段からほしいままに貪欲にしているのでなければ、これほどまでに豊かになることはありえない。大学士などが提案したとおり、例に照らして処理することが、犯した罪にふさわしい。しかし、科道官のなかには、福長安を弾劾していないものもあるし、押収した財産も和珅の十分の一、二にすぎない。和珅にはすでに寛容にも自尽を命じた。福長安も寛容に扱い、斬監候として秋審の後、処刑するかをきめる。さらに福長安を、和珅を拘束している獄へ連行し、跪いて和珅の自尽を見届けさせたのち、自らの監獄へもどすこととする。

和琳³²は、もともと何も功績はなかったが、福康安³³を木植の件に関して弾劾してから、しばしば拔擢されたのである。この木植案は、和琳が公平に弾劾を行ったのではなく、実際は和珅の指示を受けて行ったもので、福康安を陥れようとしたものであった。現在、和珅の家産を押収したところ、その私宅の楠木を使った房屋などにはみだりに制度を無視したものがあつた。これと福康安が木材を送らせたという罪に比べて、どちらが重大であるかは明らかであろう。さらに和琳は福康安とともに湖南の苗匪の鎮圧にあたつたが、和琳の掣肘を受け、福康安は自ら任務を果たすことができなかった。和琳は苗匪鎮圧にあたり、罪はあれども功績はないのである。和琳の公爵の位は、提案通り剥奪する。和琳は死後、太廟に祀られているが、これは破格の恩典である。和琳は開国の功臣と同列にできるような人物であるだろうか。和琳の位牌を太廟から撤去し、すでに作られている和琳一族の祠廟をすべて破壊せよ。

豊紳殷徳³⁴は固倫公主の夫であり、先帝は固倫公主を特にかわいがっていたため、先帝のお気持ちを慮り、まげてこれを責めることをしない。もしも今回、豊紳殷徳の官職を剥奪し、一般人と同様にするなら、体制にもふさわしくない。和珅の公爵の位は、王三槐を捕えた功績に対して与えられたものなので、提案通り剥奪する。ただし、特別に伯爵にとどめ、豊紳殷徳に継承させる。豊紳殷徳は自宅にこもり、外出して騒ぎを起こすことのないようにせよ。

豊紳伊綿³⁵は公爵の位を剥奪し、侍衛を解任する。今後、乾清門での業務は許さないが、特別に雲騎尉を授け、出身旗にもどして閑散差使とする。

錫麟³⁶は、もともと原文ママ傳靈安³⁷から雲騎尉を世爵として継いでいる。福長安が罪を得たので、侯爵も剥奪すべきであるが、傳靈安は無関係である。錫麟は特別に以前どおり雲騎尉とするが、侍衛を解任し、今後は乾清門での活動を禁止し、出身旗にもどして閑散差使とする。大学士の蘇凌阿は老齢のため体も不自由であるが、和珅は蘇凌阿が和琳の姻戚であり、さらには毫蔭して無為にその立場に残っていることを利用し、自らの才能をひけらかした。蘇凌阿はすでに八十歳を超え、跪くと起き上がるのもつらいのに、内閣の重責を果たせようか。蘇凌阿は、官品は保ったまま退任とする。

32 (鈕祜祿)和琳(?-嘉慶元年/?-1796)。満洲正紅旗人。和珅の弟。乾隆末年に駐藏辦事大臣、四川総督、工部尚書などを歴任した。

33 (富察)福康安(?-嘉慶元年/?-1796)。満洲鑲黄旗人。福長安の兄。乾隆末年には雲貴総督、四川総督、閩浙総督などを歴任した。

34 (鈕祜祿)豊紳殷徳(乾隆?年-嘉慶15年/?-1810)。満洲正紅旗人。和珅の子。

35 (鈕祜祿)豊紳伊綿。生卒年不詳。満洲正紅旗人。和琳の子。

36 (富察)錫麟。生卒年不詳。満洲鑲黄旗人。福長安の子。

37 (富察)福靈安(?-乾隆32年/?-1767)。満洲鑲黄旗人。福長安、福康安の兄。乾隆32年に正白旗満洲副都統を務める。

侍郎の呉省蘭・李潢、太僕寺卿の李光雲はみな和珅が引き立てた者である。李光雲は痰疾を患っているのに、官品を保ったまま休職とする。呉省蘭と李潢には弾劾は行われていないが、そのまま卿貳として留任させるような僥倖を与えるわけにはいかない。ともに編修に降格とする。呉省蘭は学政を解任し、南書房で業務に当たってはならない。これ以外は、提案通りとする。」

No.72

嘉慶四年正月十九日、内閣が命令を受けた。「先日、和珅の罪状を公開し、大学士・九卿などの提案に基づき、すでに和珅には自尽を命じた。和珅は長らく要職にあり、専横と隠蔽により、下々の情報は上に伝わらなくなっていた。もし悪の根源を断たねば、政治すべてを肅清することはできないし、官僚をただすこともできない。今すでに和珅の罪はあきらかとなり、この事案はすでに処理が完了した。和珅が管理していた役所は多数にのぼり、和珅の推挙により昇進したものも少なくない。地方の官員でも和珅の門前に走り、迎合して賄賂を贈ったものもいるだろう。もしこれらを一々追及し、多くの人を巻き込めば、「罰は衆に及ばず」という精神に反する。なおかつ近頃は弊害が百出して、数えきれない困難が生まれている。現在、公開した和珅の罪状のうち、重大なものはすでに周知されている。もし皆の中に朕の意図を誤解し、過度に追及を行い、さらに個人的な恨みから細かい事柄をあげつらい、一人か二人の細かなことを弾劾の証拠とすれば、きりが無い。さらに告発による報復の連鎖が起こるであろう。これでは巨悪を排除したのに、徒党を組んで争うような風潮が生まれることとなってしまい、朕の本意ではない。朕が和珅の罪を重く罰したのは、和珅が軍事・国政の重務を誤ったからである。種々の私腹を肥やす行為は、まだ罪としては小さい方である。それ故、速やかに処理を行い、いささかも容赦しなかったのである。さらに他のものまで巻き込むつもりはない。これは、将来への戒めとしようというのであって、これまでの罪を遡及しようというのではないのだから、皆、疑いや恐れを抱くことのないように。いわんや、皆のなかには優秀な人材も多く、これまでの過ちを改めれば、国家のために働くことができるものが多くいる。たとえそれまでに熱に浮かされて誤った道を歩いてしまったとしても、心を入れ替え、以前の非を強く改めれば、品行方正となるよう努めることができるし、誤って匪人に陥れられることもない。このことを再び明らかに示す。各々よろしく切磋琢磨し、朕のすべてを新たなものにしようという政治に副うように。もし今回の訓令ののちも悔い改め、身を修めて名を挙げることがなければ、自暴自棄に走ったことになり、士大夫としてふさわしくない。必ずや重く懲罰を加えるので、教え諭されていないと言わないように。この命令を知らしめよ。」

No.73

辦理軍機処から通知する。本日、命令を受けた。「以前、和珅は専横をふるうために、印

を押した文書を用いて、各省に奏摺の控えを送るようもとめた。このため、軍機処に奏摺の控えを送るようになったが、現在ではすでに禁止し、奏摺に朱批を入れている。現在、和珅はすでに刑死した。奏摺に付随して控えの文書を送ることは、永遠に禁止すべきである。もし今回の禁止以降も、前轍を踏むものがいれば、必ずや重くその罪を問い、決して容赦はしない。」以上について再び関係各所に通知するので、全員がこれを順守するように。正月十九日。

『仁宗睿皇帝実録』卷三十八、嘉慶四年正月十八日

軍機大臣らに命じる。本日提出された長麟³⁸の奏摺には、べつに和珅の閲覧のための写しが付されていた。これは和珅が勝手に（軍機処での）文書のやり取りや捺印を行っていたからで、長麟はこれに迎合すべきではない。今、和珅の権限濫用の罪は既にあきらかとなり、自尽を命じた。軍機大臣は交替を命じているので、この件に関しては、これ以上深く追及しない。長麟には、今後このような悪習は永遠に厳禁すると伝えよ。策拔克³⁹が軍機章京へ送った私信には、同樂園での芝居について尋ねる箇所があったが、これは全く不適當である。内廷における芝居の内容は、彼らの関与すべきものではない。何のためにそれを探ろうとするのか。また内廷の事情を探ろうとする悪習である。この習慣がこれ以上続くことは断じて許されない。策拔克に強く申しつけよ。

『仁宗睿皇帝実録』卷三十八、嘉慶四年正月十九日

また命じる。昨年の十二月に都爾嘉⁴⁰が、葉爾羌で採取した玉石の塊を京師まで運ぶのに、難所があると和珅に連絡した。和珅は隠匿したが、今になって軍機大臣が調べだして報告してきた。葉爾羌は京師から非常に離れており、玉石を運ぶには多大な労力を費やす。当時、もし和珅がこのことについて上奏していたら、決してこのようなことによって回民を労役したはずはない。今、都爾嘉が送ってきた原本を閲覧すれば、回民が苦しんでいる状況が読み取れる。朕は非常に彼らを憐れんでいる。このことを速やかに、運送ルートにある各城の大臣らに伝えよ。この命令を受け取った後、運んでいる玉石がどこにあったとしてもすぐに捨てて、先に送る必要はない。ただ葉爾羌から玉石を採取して送っている伯克および大勢の回民らは非常に尽力したので、奇豊額⁴¹および各城の大臣たちに命じて、伯克の頭目には緞匹

38（覺羅）長麟（乾隆13年-嘉慶16年/1748-1811）。満洲正藍旗人。乾隆40年の進士。嘉慶期には喀什噶爾參贊大臣、閩浙総督、雲貴総督、刑部尚書、兵部尚書などを歴任する。

39（博爾濟吉特氏）策拔克（?-嘉慶17年/?-1812）。蒙古鑲黃旗人。嘉慶期には喀什噶爾幫辦事務、科布多參贊大臣、駐藏辦事大臣などを歴任する。

40（愛新覺羅）都爾嘉（?-嘉慶10年/?-1805）。満洲正白旗人。嘉慶期には烏什辦事大臣、西寧辦事大臣を歴任する。

41 奇豊額（?-嘉慶11年/?-1806）。満洲正白旗人。乾隆34年の進士。この頃は葉爾羌辦事大臣を務める。

を、大勢の回民には銀両をそれぞれ褒美として与えさせるように。この件について報告すると同時に、褒美を与えて、回民を憐れむ朕の意志を示せ。

No.76

嘉慶四年正月二十日、内閣が命令を受けた。「先日、駅遞により届けられた伊江阿の奏摺には和珅への私信が付されていた。すでに先帝逝去を聞きながら、和珅への弔問ばかりで、父を亡くした朕への言葉も一言もない。恩知らずであり良心に背いているので、吏部に伊江阿の処分を厳しく議論するよう命じた。同時に伊江阿にも申し開きの機会を与えた。今回、伊江阿の回答によれば、詔書が届いていなかったことを理由に、巧みにいいのがれようとしている。さらに和珅は国家のために力を尽くしたとしながら、同時に和珅とは何もかわりなかったともあった。全く話にならない。現在和珅の罪状はあきらかであり、すでに刑死した。和珅は常日頃、貪欲に私腹を肥やしていたにもかかわらず、なお国家のために力を尽くした大官などとよべるのか。もし伊江阿が和珅と交際していないとするなら、彼が弾劾されている漕運米の過大徴収は、なにに使ったというのか。伊江阿は、かつては錯乱して是非を顛倒し、今また巧みに言い逃れようとしているが、実に尋常ではない誤りである。速やかに部の提案に基づき免職し、京師で命令を待たせるように。山東巡撫の任には陳大文⁴²を充てる。すみやかに着任せよ。陳大文の着任までは、宜興⁴³が代行せよ。倉場侍郎の業務は傅森⁴⁴が代行せよ。広東は総督・巡撫が同じ都市に駐留するので、巡撫の業務は両広総督の吉慶⁴⁵が兼務し、後任が決まり次第、命令を下す。」

No.97

軍機大臣が、雲貴総督の富に伝える。嘉慶四年正月二十八日、命令を受けた。「以前、かつて内閣学士であった尹壯圖⁴⁶が、直隸・各省の倉庫には欠損が多いのに、官員は言い訳をしてとりつくろい、何度も人々の財産を奪い取って苦しめていると報告してきた。調査しても証拠はなかったけれども、述べているところは実に理由がないわけではない。彼は諫言の臣と思われるので、すみやかに用いるべきである。尹壯圖は以前、礼部主事であった時に休暇を願い郷里に戻っている。富綱⁴⁷に命じて、すぐに来京して【拔擢】の命令を待つよう尹

42 陳大文（?-嘉慶20年/?-1815）。河南省開封府、杞県の人。乾隆37年の進士。嘉慶期に両江総督、兵部尚書などを務める。

43 （愛新覺羅）宜興（?-嘉慶14年/?-1809）。満洲鑲紅旗人。嘉慶期に江蘇巡撫、巴里坤領隊大臣、都察院左都御史などを務める。

44 （鈕祜祿）傅森（?-嘉慶6年/?-1801）。満洲鑲黃旗人。嘉慶期に兵部尚書、戸部尚書、総管内務府大臣などを務める。

45 （覺羅）吉慶（?-嘉慶7年/?-1802）。満洲正白旗人。嘉慶元年から7年まで両広総督を務める。

46 尹壯圖（乾隆8年-嘉慶13年/1743-1808）。雲南省臨安府、蒙自県の人。乾隆31年の進士。

壮図に伝えよ。あわせて駅伝の使用を認める。」命令に従い伝える。

No.98

嘉慶四年正月二十八日、内閣が命令を受けた。「以前、亡くなった御史の曹錫宝⁴⁸が、和珅の家人である劉全が勢力をたのんで私腹をこやしていると弾劾してきた。当時、和珅の勢力が最も強かったところで、【朝廷全体で】一人も弾劾する者はいなかった。しかし曹錫宝は一人で抵抗して弾劾をおこなったのであり、特に【賞賛すべきであり、諍臣の職に恥じない人物である】。今回、和珅を処罰した後、劉全の家産を調べたところ、ついに銀二十万両もあった。曹錫宝が以前に弾劾したのは、偽りではなかった。これを褒め称えて、直言を顕彰すべきである。曹錫宝には特別に副都御史の職銜を追贈する。彼の子供には加増した官銜に照らして廕生を与える。該部は例に照らして実行せよ。」

No.100

嘉慶四年正月二十八日、内閣が命令を受けた。「以前、民間で錢価が日々下落したので、京局および外省に命じて、鑄造回数を減らした。その後、各省で減らした鑄造回数の多くは以前通りになって、貨幣の鑄造を行っている。ただ戸部と工部については、未だに以前通りにはなっておらず、現在、北京の錢価はまだ回復していない。錢法の調整は、鑄造回数を減少するのか否かというだけではないのである。また京局の工匠らは、仕事がなくなって久しく、生活に困っているであろう。戸部は以前に停止した三十五回のうち、先に十七回を復活させ、工部は停止した三十回のうち、先に十五回を復活させよ⁴⁹。錢価の変化をみてから、また調整を行うように。」

『仁宗睿皇帝実録』卷三十八、嘉慶四年正月二十九日

また上奏した。「福建と浙江の両省では、海賊がいれば協力して逮捕にあたっており、担当区域を分けてはいない。港や陸路に多くの兵士を配置する必要はない。商船の出港も禁止するべきではない。」陛下の命令を受けた。「提案内容は非常に詳細であり、汝等は普段から訓練に努め、部隊を引き締めて人々を守るように。朕は乾隆四十九年に先帝に従って南巡

47 (伊爾根覺羅) 富綱 (?-嘉慶 5 年/ ?-1800)。満洲正藍旗人。乾隆46年～59年、嘉慶 3 年～4 年にかけて雲貴総督を務める。

48 曹錫宝 (康熙58年-乾隆57年/1719-1792)。江蘇省松江府、上海県の人。乾隆22年の進士。乾隆50年から乾隆53年にかけて陝西道監察御史を務めていた。

49 『清朝文献通考』卷14、錢幣 2 によれば、康熙年間に、工部宝源局の銅錢鑄造を 1 卯 (鑄造 1 回) = 6,240 貫 (=6,240,000枚)、戸部宝泉局の銅錢鑄造を 1 卯 = 12,480 貫 (=12,400,000枚) と規定している。ただし、この規定が嘉慶初年にも遵守されていたのかは不明。李紅梅「清代における銅錢鑄造量の推計 順治～嘉慶・道光期を中心として」(『松山大学論集』第21巻第3号、2009) 参照。

し、杭州に至ったことがある。現地の軍隊の騎射も実際に目にしているが、弓を放っても当たらず、馬に乗れば人が地に落ち、当時は笑い話となった。この数年、果たして訓練できているのだろうか。海賊は最も厳しく取り締まらなくてはならない。総じて、必ず遠洋に出る船の米・豆・鉄器等の搭載を厳禁すべきである。補給ができなければ、海賊たちも自然と消滅するであろう。良臣になるよう励み、期待に応えるように。」

『仁宗睿皇帝実録』 卷三十八、嘉慶四年正月二十九日

浙江省で海賊を取り締まるための章程を上奏し、御覽に呈した。「一、三鎮の水軍の船と兵士の数を定め、要地を選んで停泊し、巡回する。一、米石を海上に持ち出すことを厳禁する。一、奸悪な者が硝石・硫黄・火薬を盗み出して、海上で匪徒に渡すことを厳禁する。一、鉄や鉄器を勝手に売るために海上にでることを厳禁する。一、甲長・畧長を設けて、海賊と通じている悪人が、売買が禁止されている食糧を勝手に売り渡そうとすることを調べさせる。一、軍船を使って商船の護衛をし、海賊の被害を防ぐ。」陛下の命令を受けた。「処置は非常によい。ただ実現できるように精一杯努め、空談とならないようにせよ。」

2 嘉慶四年二月

No.105

軍機大臣らが、盛京將軍の琳⁵⁰と吉林將軍の秀⁵¹に伝える。嘉慶四年二月初一日、命令を受けた。「岳起⁵²が「盛京の人參採取は、定例では人夫（刨夫）を召募して、參票を与えて山で採取させることになっている。しかし最近では、參票で人參の数をわりあて、各州県官および各旗地の佐領、驍騎校などの官員を通して、みなに分配させている。実際には、募集している人夫は全体の三、四割にもみたく、そのほかは地元の酒造業者や質屋が引き受けている。票一枚ごとに銀八十、九十両から百両まで様々な金額が課されている。代金は商人らに參局に納めさせており、こうして買い付けに備えている。法と商人を害しており、関係するところは大きい」と上奏してきた。以前より盛京で參票を取り扱っているのは、みな人夫を募集して、人參を採取させ、官に納めさせるためである。あまった人參の売買を許しているのは、もともと人夫への配慮からしていることである。今、岳起によれば、近來このことはついに官による請け負いとなり、商人らに割り当てて參局に銀を納めさせ、採取を代行さ

50 （愛新覺羅）琳寧（雍正6年-嘉慶10年/1728-1805）。満洲鑲藍旗人。嘉慶期には工部尚書、吏部尚書、礼部尚書を務める。

51 （富察）秀林（?-嘉慶15年/?-1810）。満洲鑲白旗人。嘉慶期には吉林將軍、工部尚書、吏部尚書を務める。

52 （鄂濟）岳起（?-嘉慶8年/?-1803）。満洲鑲白旗人。乾隆36年の拳人。嘉慶4年から嘉慶8年にかけて江蘇巡撫を務める。

せている。参票を持って自ら山にはいる人夫がいれば逆に番役らに捜査させて、その人参は盗掘として廉価で買い付けている。どうして商人と民に累を及ぼさないことがあろうか。この人参については、該地の特産物であるので、採取・献上すべきものである。ただ朕の意としては、献上を重視してはいない。ましてや現在、各地の関税のうち余剰が出た分について、(上納の額)を減額させようとしているのに、この人参の件によって商人・民人に累を及ぼすことができようか。今回、岳起からこの報告があった。もし調査・対処しなければ、商人の財産が害されるだけでなく、民業も妨害される。原本を將軍らに渡して、これまでの定例を調査させて、どのように処理すれば、商人・民人に累を及ぼさないですむのかを心を尽くして協議し、事実を踏まえて報告させよ。少しも隠し立てすることのないように。」命令に従い伝える。

No.106

下げ渡された岳起の上奏を、臣らが詳細に閲覧した。調べたところ、地方の省では幕友は必須ではあるが、関防(地方官の官印を使わせること)は当然厳禁すべきである。もし地方官がもっぱら幕友に頼り、(公務を)すべて任せるのであれば、弊害は自ずと随所に生じてしまう。もし地方官が心を尽くして事にあたり、留意して監督していれば、幕友は当然ながら恣には振る舞えない。上奏にあった幕友の眷属が公署に住み込んでいる件については、おそらくは各地の事情が異なっており、一括して処理することは難しい。また上奏にあった、幕友が地方官に賄賂を贈った場合、地方官と同じ例に照らして処罰するという件について調べたところ、地方官が罪を犯した時、もし幕友が請願したり賄賂を渡すといった事情があったなら、もともと一緒に処罰することになっており、罪を逃れることはできない。ただし、もし地方官だけが罪を犯したなら、幕友にまで処罰の対象を濫りに広げるにはおよばない。岳起の上奏は、もとより弊害を防ぐためであるが、官の規律を正す要務ではなく、議論する必要はない。謹んで原本を返却する。謹んで上奏する。二月初一日。

No.122

嘉慶四年二月初六日、命令を受けた。「葉爾羌や和闐などで取れた玉は、以前は民間での売買を認めており、禁止してはいなかった。高樸⁵³が商人と結託して玉を採取・販売していた事件から、始めて例を定めたのである。およそ勝手に新疆に赴いて玉を密かに販売した場合、窃盗の例に照らして金額を勘案して罪を論ずることとなった。これはもともと、旧例にあったものではないし、【ましてやなお盗み出して売る者がいる】。今回、これまでの案件を

53 (高佳) 高樸(?-乾隆43年/?-1778)。満洲鑲黃旗人。乾隆41年に葉爾羌に派遣され、現地で採取した玉石を蘇州などの地で販売していた。しかしこの件が永貴によって告発されると、高樸は失脚し処刑された。

しらべると、巻き添えとなって処罰された者は多く、朕は忍びなく思う。刑部の議論に照らして、以後は新疆の玉石を販売した場合、加工したかどうかに関わりなく、すべて罪を免じる。以前に玉を販売した犯人たちは、刑部に報告して釈放することを許す。勝手に人参を掘り出した事件については、ただ一人で潜り込んだものでも、これまで量の多寡を問わずに満流としており、区別がなされていない。以後は提案通りに量を勘案して罪を論じ、それによって公平をはかるように。他は提案の通りにせよ。」

No.132

上奏が下げ渡された。上奏では、塩の値段がたびたび上昇して制錢十七文にまでなり、江南などではさらに高値になっていると報告があった。調べたところ、長蘆の塩は先頃から錢によって定価を定めていたが、各州県の塩坵との距離は違っており、定価も異なる。三十餘年来、生産コストはしだいに高くなり、課税額も増えた。しかも錢価はひごとに下落し、錢を銀にかえた場合でも、税と運賃には足らず、逐次、商人たちは値上げを求めてきた。現在、各州県の塩価は安ければ二、三文、高ければ二十餘文であって、十七文を基準とはしておらず、一律にしたり、減らしたりするのは難しい。江南などの塩は、これまで銀によって値段を定めてきた。かつ水運による転売の事情は各地で違っているが、上奏内では詳細に述べられておらず、議論はできない。謹んで原本を返却する。謹んで上奏する。二月初八日。

No.140

以前に「軍機処の満漢章京は、それぞれ定員を十六人として、内閣・六部・理藩院から候補者を選び、軍機大臣が引率して謁見させて、朕の任命を待つように。軍機処の次回の昇格リストに記入されてる中にもし欠員ができれば、順次補充せよ」との命令を受けた。現在、満洲章京として補充すべき六名、漢章京として補充すべき九名がおり、これで定員十六人となる。ここに各役所から推薦があったのでリストを提出し、それぞれの履歴や評価を緑頭牌に記して、引率・謁見する。伏して任命を待つ。謹んで上奏する。二月十一日。

No.148

嘉慶四年二月十二日、内閣が命令を受けた。「給事中の広興⁵⁴が「道・府・州・県などの官は、地方を管理しており、責任は非常に重大である。捐納をした者が始めて官界に足を踏み入れて、一旦濫りに重責を担ってしまえば、過ちを犯すことは免れがたい。今回、俊秀・附学生から捐納によって道員・知府・知州・知県となった者については、みな実缺への任命を停止する。しかしなお金銭を納めれば各省にふりわけ、総督・巡撫に試用させることを許

54 （高佳）広興（?-嘉慶14年/?-1809）。満洲鑲黄旗人。乾隆前半に两江総督を長期にわたって務めた高晋の子。嘉慶帝に重用され総管内務府大臣を務めるが、失脚し処刑される。

す。もし任に堪えられる人材であれば、三年たった後に検討の上、採用するように」と上奏した。これは地方を慎重に治め、吏治を清くしようとしたものであり、その意図はもとより非常に良い。もし捐納を始めた時に上奏していれば、もとより採用したであろう。ただし現在、この四項の人員は、みなすでに捐納に応じて金銭を納めており、該給事中がこれを言い出したのは、遅いといわざるをえない。捐納によって仕えた者の中にも、もとより用いるべき人材はいる。官になる方法は数多く、捐納もまたもとよりやむを得なかったといえる。今すでに旧例通り捐納に応じ、必要な金銭はすでに納めているのに、任命を停止すれば、不信任感を抱かせるであろう。さらにその後、また金銭を納めさせて各地にふりわけるのは、政治のあり方として特に問題がある。該給事中のこの上奏は、許可できない。上奏してきた、捐納に応じた人員を吏部で任命する時、数人の科道官を派遣して監視させるという一節については、弊害を防ぐ手段として有益である。その通りにせよ。原本を下げ渡す。」

No.149

嘉慶四年二月十二日、命令を受けた。「刑部・都察院・大理寺が報告してきた、湖南省の杜梅兆が母親の黄氏の財産を盗み、自殺に追い込んだ一件で、違犯教令の例に依拠して絞監候にしたことは、もとより前例を踏まえた処置である。今回、事件を詳しく調べたところ、杜梅兆は遊蕩を好む素性であり、母親の教えに従わず、相続した田畑をすべて売り払い、借金をつくって返せなくなると、母親の膳田を転売して返済にあてた。杜梅兆はまた無情にも窃盗をし、そのために母親は憤りをかかえて首をつったのであって、罪は犯していなくても、人倫にもとる。杜梅兆をすみやかに絞殺に処するべきである。以後、もしこのような事件があれば、法律を司る役所は例に従って罪を定めて報告せよ。内閣はなお票籤を作成し、この案を説帖に加えて、題本につけて報告して、朕の判断を待つように。」

No.161

嘉慶四年二月十五日、内閣が命令を受けた。「陳用敷⁵⁵が報告してきた、印封を盗み出し、常関の金銭をだまし取ろうとした一案については、既に軍機大臣・王に刑部とともに処罰を協議し、報告するよう命じた。陳卿延は空白の印封を手元に留めておいて、公文書を捏造し、関税をだまし取ろうとしたのであり、各衙門の公文書を盗み、軍機・錢糧に関わる場合の律（『大清律例』吏律・棄毀制書印信条か）に照らして、絞監候と提案した。今回、陳用敷が速やかに処刑の実施を求めたのは、本律の外で厳重に処罰しようとするものである。前に、内外の刑罰を定める役所では、ただ律に照らして判断し、律外で厳罰に処するべきではなく、重大な案件であれば、必ず朕の判断をまつよう命じた。陳用敷は命令を受け取る前にこの案

55 陳用敷（?-嘉慶4年/?-1799）。浙江省杭州府、海寧県の人。乾隆25年の進士。乾隆末に湖北巡撫、貴州巡撫を務める。この時には安徽巡撫であった。

件を処理したので、このように提案したのである。ただし、人々への警告にするという文言は、律をふまえた上奏文にふさわしいものではない。陳卿延については、軍機大臣らに回答させた時に本律に照らして絞監候としており、この判断は律にも符合している。今年の秋審に加えて処置するように。九江道道員の劉撲⁵⁶は、陳卿延が常関にやってきて金銭をだまし取ろうとした時、官封だけを持っていて印文はなかったことから、疑わしいと判断して、金銭を支給せずに拘留して、事実を調べて報告すべきであった。そうでなくても、巡撫に即座に報告して調査すべきであったが、彼は調査をせずに、陳卿延を立ち去らせてしまった。もし朱珪⁵⁷が注意深く調べだし、蕪湖関の官員に取り押さえるよう指示していなければ、重要犯人を取り逃がすことになったであろう。劉撲を処罰すべきである。吏部に処分を協議するよう命じる。」

『仁宗睿皇帝実録』卷三十九、嘉慶四年二月十六日

軍機大臣等に命じる。福寧⁵⁸が行った軍糧の計画についての報告には、特にあやふやな言葉が多い。この度の軍務は長期にわたっており、軍事費は既に銀七千万両を超えている。これまでに稀なことである。総じて、彼らが和珅の庇護を恃んで、恣にふるまい、全く憚ることのなかったためである。兵を率いる大官は、みな福康安と和琳の習に従い、軍中で宴会や娯楽にふけており、国家の経費を彼らの遊興に費やしたのである。これらの積弊は、朕がみな熟知している。現在、各地の報告が朕に届かないことはない。軍機大臣は朕の指示を受けて命令を書く以外には、およそ内容を知らない。全ての賞罰は、みな朕が自ら決定したものである。臣にもしわずかな功績があった場合でも、軍機大臣が推挙するものではないし、もし罪があった場合でも、軍機大臣が敢えて救いだてするものでもない。彼らがもし前非を改めなければ、自ら重罪に甘んじたのである。軍事費については、もとより正しく使用し、正確に報告すべきであり、たとえ例外的に融通をきかせる場合でも、必ず確認できるだけの実情があるべきである。現在のように、各方面の軍で日々の支出は多いのに、支給を遅らせれば、多くの場合は兵を空腹にさせてしまう。兵を率いる大官などは、好き勝手に費用を用いており、指示を受けた者もあえて問いはしない。その乱用がさらに甚だしくなるのも、当然である。勒保⁵⁹は経略大臣で、備蓄を管理する者であり、福寧は軍糧の責任者である。もしまた節約を知らずに、以前のように一緒に欺こうとするなら、かれらはただ自らの家のた

56 劉撲（雍正12年-？/1734-？）。漢軍旗人か。この後は蘇州府、松江府で通判を務めている。

57 朱珪（雍正9年-嘉慶11年/1731-1806）。直隸省順天府、大興県の人。乾隆13年の進士。嘉慶帝の腹心で、戸部尚書を嘉慶4年から嘉慶10年まで務める。

58（伊爾根覺羅）福寧（乾隆4年-嘉慶19年/1739-1814）。満洲鑲藍旗人。两江総督を乾隆60年から嘉慶3年まで務めるも、この後に失脚する。嘉慶8年から嘉慶9年に駐藏辦事大臣となる。

59（費莫）勒保（乾隆5年-嘉慶24年/1740-1819）。満洲鑲紅旗人。白蓮教反乱の鎮圧に尽力した嘉慶期の重臣で、後に軍機大臣も務める。父親の温福は乾隆半ばの軍機大臣であった。

めに慮らないというだけではない。訥音⁶⁰については、既に調査を命じてある。今回の報告の中で、開県に駐屯したとあるが、逗留でなければ何のためか。各地で療養している満漢の兵士について、すみやかに調査し、それぞれを旗や隊伍に帰還させて、それによって憐れみを示して無駄な経費を省くように。これを知らしめよ。

No.174

嘉慶四年二月十七日、内閣が命令を受けた。「宗室には以前から会試に参加できる規定があったが、後に停止されている。先帝のお考えをおもんばかるに、もともと宗室は騎射に習熟し、満洲の旧俗を保つべきであるのに、文芸を専らにし、漢人の風習に染まって、弓馬がおろそかになることを憂慮されたのであろう。しかし、試験を停止した後でも、騎射は未だに上手くならない。宗室の数は増えており、受験を認めて、登進の道を広げるべきである。あわせて読書によって気質を変えさせることができれば、職がなくて別に問題を起こすこともない。かつ試験の前には、馬上や地上での弓術の技量を確認してから、はじめて入場を許すことになっているため、騎射だけが廃れはしない。旧制では、宗室はみな郷試を受験せずに、会試に赴いていたが、過剰優遇であると言わざるを得ない。以後、科挙を受ける宗室は、嘉慶六年から生員・監生と共に郷試を受けることにするので、合格枠を定める必要がある。礼部に協議・報告させ、朕の決定を待つように。また以前から、宗室の人員は、宗人府に勤めて科道官に昇進するだけであった。その官途はやや狭い。以後、各部の官員として宗室を用いることを許す。どのように定員を定めるのか、吏部に命じて宗人府と協議の上、報告させよ。」

No.188

嘉慶四年二月二十四日、内閣が命令を受けた。「以前から大逆罪に連座した者は、律に従って扱っていた。もとより実際に反逆したのであれば、当然法典をふまえて、懲罰すべきであるが、大逆に連座すると見なされた者と、実際に罪を犯した者とは違っている。かつての徐述夔・王錫侯などは、みなその著作が狂悖であったので、家族や子孫も大逆に連座するとみなして罪を定めたけれども、しかし意外なことに、文字や詩文による罪にも軽重があるのを知らなかったのだといえよう。ましてやこれらの犯人たちは、本朝に生まれ育ち、その祖父や曾祖父の世代から手厚い恩沢を受けて、既に百数十年餘りがたっている。どうしてまた前朝を慕って、本朝に怨みを抱いて攻撃する者だろうか。言葉尻をつかまえて脅し、瑕疵を指摘したと言わざるをえない。たまたま不適切な文章を書いたからといって、反逆と同罪にするならば、誣告のきっかけを作ることになり、また情と法のあり方からはずれている。刑

60 訥音。生卒年不詳。乾隆58年に鑲白旗蒙古副都統に就任している。（『高宗純皇帝実録』巻1424、乾隆58年3月4日）。

部は、本当の大逆犯に連座すべき者については調査する必要がないが、大逆罪とみなされた者の家族や子孫で流刑になっていたり、まだ監獄に入っている者について詳細に調査し、事情を記したリストを提出して、朕の決定を待つように。」

No.190

軍機大臣が湖広総督の景⁶¹に伝える。嘉慶四年二月二十五日、命令を受けた。「朕が聞くところでは、武昌府の同知である常丹葵は、【昨年】指示を受けて劉之協の搜索を行った際、好き勝手に村民を脅しており、無辜の民数千人が累を受け、その拷問は極めて残酷であった。聶傑人が人と相談して逮捕を拒んだ時、常丹葵はなお安撫を知らず、問題を拡大させてしまった。邪匪が称する官逼民反は、みな該同知によって引き起こされたものであり、【実に最も罪が重く】、正確に取り調べて、厳しく処罰しないわけにはいかない。景安に伝えて、常丹葵を免職・逮捕させ、適切な官員を派遣して速やかに北京まで護送し、刑部に引き渡して厳しく取り調べて報告するように。【もし派遣した官員が誤って、罪を恐れるあまり自殺させてしまったなら、それらはみな景安の咎である】。あわせて証人になれる者も北京に送るように。胡齊崙⁶²が軍事費を横領した件について、景安はすでに四ヶ月もの間調査しているのに、未だに報告がない。先頃すでに、胡齊崙を北京に護送するよう命じた。どうして四ヶ月もの間、景安は未だ何の手かがりも調べだしていないのか。景安に命じて、取り調べの状況と、先延ばしにしていた理由を、事実に基づいて先に回答させよ。この命令を知らしめよ。」命令に従い伝える。

No.194

嘉慶四年二月二十六日、内閣が命令を受けた。「先日、「貴州の学政は今まで童生をとる際、慣例として（童生から）紅案銀を三両、八両ほど受け取っているが、その額はますます高くなっている。廩保・書役はこれを利用して金銭を要求し、ついには銀四十両、五十両にまで至っている」との報告があった。そのため軍機大臣に命じて、勤めを終えた貴州学政の談祖綬⁶³を呼びださせた。彼の説明によると、各省の学政にはみな棚規というものがある。全ての書役の食事代に、朱色の墨や答案用紙の代金、会場の設営費などの費用は、みなここから取っている。ただ貴州には棚規が全くなく、以前から童生を採用した後には、紅案銀を出させていたのである。一人あたり銀一、二両から五、六両ほどで、試験費用にあてていた。談

61 （鈕祜祿）景安（?-道光3年/?-1823）。満洲鑲紅旗人。嘉慶3年-嘉慶4年にかけての湖広総督。白蓮教反乱の鎮圧に失敗し失脚するも、嘉慶9年ころより山西、直隸の按察使として復活する。

62 胡齊崙。生卒年不詳。安襄郎道の道員であり、嘉慶3年10月に景安に弾劾されている。（『仁宗睿皇帝実録』巻35、嘉慶3年10月19日）。

63 談祖綬。生卒年不詳。浙江省湖州府、德清県の人。乾隆52年の進士。

祖綬が各府で試験を行った際も、またこのように処置したのである。ただ財力に応じて求めているのであり、以前から銀四十両、五十両もの高額にはなっていない。これらの棚規や紅案の銀両は、もともと陋規であった。貴州学政の養廉銀はもともと少なく、貴州は北京から遠く離れている。学政は家属をひきつれ、幕友を招いて任地に赴くのであり、必要な費用はどうしても多くなってしまう。しかし該省には棚規がないため、試験に関する全ての費用は、新しく童生になった者に勘案して贈らせていたのである。このことは、なお情理の中にある。各省の学政の棚規は古くからの陋習であって、試験費用を補うのは、秀才の資格を私に売ることとは比べられない。もし棚規、紅案の銀両をすべて廃止すれば、学政の公務はことごとく滞ってしまう。どうして学政に不正な採用や、賄賂の受け取りなどをさせられようか。ましてや各省の地方官が得ている各種の陋規は少なくないが、なお一つ一つ禁止するのは難しい。貧しい読書人の家の出身で、科挙の試験を監督した者の過ちだけを厳しくあげつらう理由も、特にはない。ただこの紅案銀は、新たに童生となった者が財力に応じて納めるべきもので、総じて銀五、六両を超えてはいけない。本当に財のない者は、資産に応じて減免すべきであり、強制的に差し出させてはいけない。こうすれば学政はゆとりを持って公務にあたることができ、新たに採用された貧しい者もまた、憐れみを受けることができる。もし学政らがさらに金銭を要求したり、甚だしい場合は士人を評価する時に、法をまげて貪婪な要求をしたならば、必ず重く処罰し、少しも容赦はしない。これを知らしめよ。」

No.197

辦理軍機処が調査を行った。山東省汶上県の貢生である韓貫一が、知県の熊官梅によって額外の税を徴収されたと訴え出てきた件について、都察院から報告を受けた。現在すでに、本処が刑部と共に調査をしている。韓貫一が提出した納付証明書の中には、嘉慶元年に韓有仁が本年の漕糧六合五勺を完納したという一枚がある。また嘉慶二年に韓有仁が、嘉慶元年の漕糧一升七合を完納したという一枚もある。嘉慶元年に納めるべき漕糧については、既に印を押した納付証明があるのに、何故嘉慶二年になってまた前年の分を徴収しているのか。しかもその数量は前年より増えている。或いは該戸に未納があったのか。或いは以前に徴収を一部猶予したので、それを補うべきであったのか。或いは、ついに熊官梅が完納したのに不足があるとして、実際に追加徴収したのか。必ず事情を徹底的に調査して、確かな判断を下すべきである。山東巡撫に伝えて優れた道、府の大官を派遣させ、韓有仁が毎年納めるべき若干の漕糧について、県が実際に徴収した帖簿と、納税額の記載されている控えとを詳細に検査させるように。もし余分に徴収していたのが事実なら、断じて韓姓だけにとどまるものではない。このほかにも漕糧を納めた各戸の証明書について調査し、今回のように嘉慶二年になって嘉慶元年の漕糧を徴収した証明書、ならびに規定以上に徴収したと思われる証明書を数十枚選び、あわせて各戸も選びだして確かな供述をとってまとめ、調べだした証明書とこの案件について以前に該省が審議した記録と一緒にして、本処まで急ぎ送るように。ま

た訴えの中に、完成した河川工事の人夫代六十文を二重取りした証明書が二枚があった。これは人夫代を二重取りしたものであるのかどうか、また徹底的に調べるべきである。快頭の張從先が連帯保証の費用として京錢三十八千文をだましとった件については、韓貫一の供述によると、現在自筆のものが省城の記録の中にあるので、該巡撫に確認させて本処に送らせ、張從先も先行して北京に護送させて取り調べるべきである。事件は陛下の命令によって取り調べているものであり、事実に基づいて迅速に本処に回答するべきである。万に一つも遅れることなく回答を送るように。二月二十六日。

No.205

嘉慶四年二月二十七日、内閣が命令を受けた。「前に和珅が悖妄不法にして賄賂を貪っていたことは、大きな問題であったので、免職・逮捕した。その時に、定親王の綿恩⁶⁴らを派遣して家産を没収したところ、真珠の念珠が二百餘本、その他の珍しい宝や金銀などは、数え切れないほどであった。既に何度も命令して、和珅の数々の罪状を明らかにして示している。ここにまた綿恩らが、真珠で作られた朝珠（官服の上からかける数珠）を呈覧してきた。朕はこれを見て非常に驚いている。真珠で作られた朝珠は、天子が用いる珍品である。どうして臣下が所有できるものだろうか。もし貢ぎ物だというなら、どうして紐にみな茶色を用いているのか。献上に備えていたのではないことは、明白である。そのため綿恩に尋ねた。彼によると、かつてこの件について和珅の家人に訊問したところ、和珅は日中は敢えて用いず、往々にして夜間の人がない時に、密かに着用して、鏡の前で徘徊しており、一人談笑していたが、非常に小声でつぶやいていたため、聞き取ることはできなかったとのことであった。このような状況から判断するに、ついに反逆を企てようとしたのであろう。もしこの事が正月十八日以前に明らかになっていれば、凌遲処死にしろくとも、死刑にはするべきであった。今、既に自殺をさせたために、幸運にも処刑を逃れ、さらしものになることを免れさせてしまったのである。彼の子の豊紳殷徳が、もしこれを知っていながら告発しなかったのであれば、大逆縁座の律に照らして処置すべきである。今、綿恩らが繰り返し取り調べたところ、彼は本当に知らなかったもので、特別にこれ以上の追及はしない。ただし、伯爵を世襲するべきではない。豊紳殷徳の伯爵位を奪い、世襲を停止するが、散秩大臣の職銜は与えて、職務につかせるように。綿恩・淳穎⁶⁵・縕布⁶⁶・佶山⁶⁷は細心の注意をはらって調べだし、和珅が反逆しようとしていた痕跡を埋没させなかった。その処置は非常によろしい。みなを議叙するように。」

64 （愛新覺羅）綿恩（?-道光2年/?-1822）。満洲鑲白旗人。乾隆帝の孫。嘉慶期には領侍衛内大臣、正白旗満洲都統などを務める。

65 （愛新覺羅）淳穎（?-嘉慶4年/?-1799）。多鐸が6世祖。乾隆43年に和碩睿親王となる。

No.206

嘉慶四年二月二十八日、命令を受けた。「本日、張長庚⁶⁸から請安摺が一件送られてきた。その中にはただ「叩慰睿懷」の四文字があるだけであった。各省の総督・巡撫・布政使・按察使などの中には、先帝が亡くなったと聞いて、哀悼の意を示したり、朕の身を案じる者も多く、また請安摺を特別に送る者もある。今、張長庚は請安の字の下に、「叩慰睿懷」の四字を書き添えてきた。今までこのような形式は見たことがない。ましてや湖北地方は平穏とはいえない。現在、四川・陝西の賊匪が既に遠く離れたのかどうか、民情がおおむね落ちついたのかどうか、当然あわせて報告するべきであるのに、一言も言及がない。【まさに地方の大官が、民情に対して茫洋として関心がないことがわかる。甚だ】誤っている。張長庚を訓戒し、なお事実を報告させよ。」軍機大臣が命令に従って、湖北按察使の張長庚に伝える。

No.210

嘉慶四年二月二十九日、命令を受けた。「先頃、張長庚が送ってきた奏摺では、請安の字の下に「叩慰睿懷」の四字が加えられていたので、既に朕が訓戒した。本日、祖之望⁶⁹が送ってきた請安摺でも、また張長庚と同じ字句が書かれていた。もし同城で互いに相談したのであれば、どうしてこのように一致するだろうか。見たところ、この奏摺はついに相談して書いたものであろう。もし同じ所属の官吏を弾劾する時には、密に上奏すべきであるのに、みなこのように通じ合っているなら、その弊害は言うに絶えない。現在、臣下の上奏で、朕に直接届かないものはない。もし地方を治める大官が、なお一緒になって陋習をくりかえすなら、朕のところまで阻むものはないといっても、すでに外省で隠し立てしていることになり、政治にとって一体何の益があらうか。祖之望を訓戒するように。以後はこれまでの誤りを改めるよう努め、真剣に職務に取り組み、同じことを繰り返して罪を犯さないようにせよ。」軍機大臣が命令に従って、湖北布政使の祖之望に伝える。

No.213

嘉慶四年二月三十日、内閣が命令を受けた。「胡季堂が、没収した糧食を順天府の文安・大城二県の水害にあった村民に貸しあたえるよう求めてきた。文安・大城の二県は、昨年に水害にあった。現在、窪地の水はまだ残ったままであり、調査の上救済すべきである。求め

66 (金佳) 縑布 (?-嘉慶14年/?-1809)。漢軍正黄旗人。嘉慶4年3月、乾隆帝の埋葬にともない縑布のおばにあたる淑嘉皇貴妃の一族が満洲正黄旗に移されたため、これ以降、満洲正黄旗人となる(『仁宗睿皇帝実録』巻41、嘉慶4年3月27日)。嘉慶期には総管内務府大臣、工部尚書などを務める。

67 估山。生卒年不詳。嘉慶期に両淮塩政、総管内務府大臣を務める。

68 張長庚(乾隆4年-?/1739-?)。河南省河南府、陝州の人。この頃は湖北按察使。

69 祖之望(乾隆20年-嘉慶19年/1755-1814)。福建省建寧府、浦城県の人。乾隆43年の進士。この時は湖北布政使で、この後も陝西巡撫、広東巡撫、刑部尚書などを歴任する。

てきた通りに、和珅の家人であった呼什図の米・麦・粟・豆・雜糧など一万千六百十五石あまりのうち、八割を文安県に、二割を大城県に分けて、水害を受けた村民に貸しあたえて食糧とさせよ。既に土地は乾いたけれども、種を購入できない者には、この中から貸しあたえよ。ともに豊作の年を待って、利息はとらずに常平倉に収めさせれば、春の耕作の際に早くも土地を耕し種を植える助けとなり、民にも余裕がでるだろう。」

本研究は平成28年度三菱財団人文科学研究助成ならびにJSPS科研費17K13548、26770239の助成を受けたものである。